金賞

一人にしないで

横須賀市立大楠中学校三年　鎌倉帆花

「孤独死だったんだって。」

母のその言葉に私は少しゾッとした。遠い親戚の人が亡くなったらしい。孤独死。なぜそのような事になったのだろうか。そう思ったが、今まで一度も関わりがなかったためか私にはどこか遠い話の様に感じた。

その日はいつもよりゴミが多く、母を手伝って久しぶりに一緒にゴミを捨てに行っていた。ゴミ捨て場に行く途中で、膝をさすり痛そうにしながらゴミを置いて休んでいるお婆さんの存在に気がついた。

私は「手伝いましょうか。」と声をかけようと思ったが、そのお婆さんとは顔見知り程度で話したことがなかったので、声をかけるのを躊躇してしまった。だが、母は私とは違いすぐにお婆さんの近くに寄っていき、「私が持っていきますから休んでいてください。」と声をかけ、迷うことなく手伝った。

後から、母にお婆さんの話を聞いた。どうやらあのお婆さんは足が悪く、そのうえ一人暮らしをしているらしい。私は知らなかったが、母はそのお婆さんと普段から交流があったらしく、そのため、すぐに声をかけることができた様だ。

その時私は、ふと孤独死をした親戚の人の話を思い出した。その人の周りはどのような環境だったのだろうか。自分を気にかけてくれる人は居たのか。もし、そのような人が居たならば、もっと良い最後を迎えることができたのではないか。そして今母から聞いた話と重ね合わせると、お婆さんの事が急に心配になってきた。しかし、私は家族ではない。何もできない。そう思っていた。

それから少し日が経ち、町内会の班長の当番があのお婆さんに回ってきた時のことである。母は、あのお婆さんにはきっと大変で出来ないだろうから、と交代を申し出ようとしていた。母のその行動に私はハッとさせられた。私は何もできないのではなく、何もしようとしていないだけだったのだと。家族でなくともできることはたくさんあるのではないかと考えるようになった。

この出来事の後から私は、周りの人とのコミュニケーションを大切にするようにしている。深い関わりを持つわけではないが、挨拶を交わしたり、おしゃべりをする時は明るく接してみたり。このように少し会話をするだけでも、相手に楽しいと感じてもらえるかもしれない。また、私も人との関わりを少し意識するだけで周りの人々について今まで知らなかった事を知ることができ、関心を持つようになった。実際、私はあの後からお婆さんを見かけたら積極的に挨拶や会話をするようにしており、その時に見せてくれるお婆さんの優しい笑顔に、私もいつも明るい気持ちにさせてもらっている。

知ろうとしない事は、その人の存在を無かったことにしてしまう。家族じゃないから、他人だから、といって突き放すのではなく、関わりをもつ。そういった事の積み重ねで築きあげる人との繋がりが、社会的孤立を逃れるただ一つの方法なのではないかと私は考える。

こういった事は高齢者だけでなく、全ての人にいえると思う。現在はコロナ禍でリモートを利用して様々な事を行うなど、接触を避けるようにと言われている中で、人と人との繋がりがますます希薄化している。そのような状況下でもコロナだから仕方ないと諦めてしまうのではなく、自分で何か考えて人との関わりを大切にしていくべきであると思う。そして互いに見守り、支え合う環境を社会全体で築きあげることが重要となるだろう。これが「一人にしない」ことの第一歩ではないか。

金賞

希望を持って歩む人のために

横須賀学院中学校三年　廣瀬マシロ

私は今年の五月に突発性難聴と診断されました。耳だけは良かった自分がそう診断された時、夢を見ているような感覚でした。診断を受けてから耳は一向に良くならず今では左耳はほとんど聞こえない状態です。耳が悪くなってから私は人と喋る時に心の中で距離を取るようになり、これまで以上に相手の顔色を伺うようになりました。友達や先生と喋る時、最初の頃は聞き返していたのがだんだん聞き返さなくなりました。私が今聞き返してしまったら話の内容が止まってしまう、めんどくさいと思われてしまう、そう思うようになりました。それから私は障がい者の方についてよく考えるようになりました。聴覚障害者の方々は会話をする時どんな思いがあるのだろうか、そう考えるようになりました。また、障がい者は世界ではどのような立場なのだろうと疑問を持ちました。そこで私は聴覚障害者の方を中心に障がい者の方々について調べてみました。

世界には聴覚障害者の方が四億六六〇〇万人います。聴覚障害者の多くは平均所得が低い国の人たちで、適切な医療措置がとられていないそうです。また、学校や社会でもいじめや虐待は絶えないそうです。私はこれを知りＳＤＧｓの、３「全ての人に健康と福祉を」、10「人や国の不平等をなくそう」につながると思いました。ここまで、障がい者の方にとって辛い、悲しい部分を話してきました。障がい者は確かに私たちの当たり前にあるものがないかもしれません。でも弱者ではないのです。アメリカでは障がい者（ｄｉｓａｂｌｅｄ　ｐｅｏｐｌｅ）と言わず、障がいと共に生きる人（ｐｅｏｐｌｅ　ｗｉｔｈ　ｄｉｓａｂｉｌｉｔｉｅｓ）という言い方をして、「人」というものに焦点をおき、私たちには人間として同じ権利があることを強調しています。そして障がいという悪く言ってしまえばコンプレックス、よく言えばその人の個性、それを大切に、時には苦しんでも素晴らしい人生を歩んでいる人がたくさんいます。これから歩もうとしている人もたくさんいます。私は色々な動画を見てそんな人をたくさん見ました。その中でも印象が強く残った動画があります。

それはある家族の動画です。両親は聴覚障害者で息子は健常者の３人家族です。その動画でお父さんが、「手話を見ていることで息子の思いがすごい心にしみる」と話していました。私は衝撃を受けました。手話では言葉を伝えられても思いは伝えられないと思っていたからです。口では、喋る時に強弱をつけたりで思いは伝えられるけれど、手話ではできないという自分の考えを一八〇度変えさせられるものでした。そして私はなんで手話でも思いが伝えられるのだろうかと考えました。そして頭に浮かんだのが「聴」という漢字でした。小学生の頃、先生に「聴く」とは耳と目と心で聴くという意味があるのだ、と教えられました。私は思いました。私たちは日々の生活で、この耳と目と心を使って会話をする、つまり人と繋がっていくのではないかと。人によっては三つ使えない人もいます。聴覚障害者の方は耳が使えなくて、視覚障害者の方は目が使えません。しかし、どんな人でも心は使えます。私は心を使うには、耳と目が必要だと思います。だからあのお父さんは手話から思いが伝わると言ったのだと思います。なぜなら息子さんの一生懸命な手話を目で一生懸命見ているから心に伝わるのだと思うからです。また同時に自分のとっていた行動が間違っていたことにも気づかされました。私は突発性難聴になってから人と距離を取るようになりました。でも距離をとってしまったら「聴く」という人との繋がりをもつことができなくなってしまいます。私はまだ目も耳も使えます。心が離れようとしたら目も耳も「聴く」という動作を疎かにしてしまうと思います。突発性難聴になってしまったから離れるのではなく、なったからこそ、今まで以上に自分から聴くという動作をしなければならないのです。

これらのことから私は障がい者の方に対しての見方が変わりました。私はこれまで障がい者の人はかわいそうな人、悲しい人生が多いという考えが多かったです。かわいそうな人だから面倒見てあげなきゃ、助けてあげなきゃと、そう思っていました。でも違いました。他の人にはないものを持っているからこそ素晴らしい人生を作ろうと希望を持っている人なんです。だから私は、その素晴らしい人生を作る架け橋になる手助けをしたいです。次はかわいそうな人のためではなく希望を持つ人のために。また、自分自身が突発性難聴である自分と向き合い、いつか、突発性難聴になったからこそ今の自分へと成長できたんだと誇れるような行動をとっていきたいです。